

ゾウの道

宗内 綾子

人口は爆発的に増えている。開墾地の拡大、動物生息地の破壊、人間との接触がもたらす混乱や病気の感染、さらには温暖化やエコシステムの破壊、また国際通商の高まりとともに増え続ける密猟など、世界規模での人間の活動がアフリカの生態系に壊滅的な影響を与えている。

授業では、折に触れ、英語圏のDVDを取り上げる。英語を学ぶだけでなく、多様な文化・視点に触れ、知遊の世界を広げる楽しみを味わってほしいからだ。

先日は、BBC(英国放送協会)のドキュメンタリー『アフリカ』を観た。知られざる生命の世界を提供しながら、

アフリカの動物の多様な生態を追って

いる。

ナレーションの英語もわかりやすく、格好の教材だ。

だがとりわけ理科系の学生にとって面白いのは、人類の「発展」や「進歩」の意味を、問いかけていることだ。人間は科学技術の発達とともに繁栄し、

「未来」と題された最後のセクションでは、あの広大な大陸で必死に生きる動物たちの多様な生命が、人間の存在と活動にどのように追いつめられているかが描かれる。多くの動物にとっては、最善ではないにせよ、人間による管理体系の中での生存方法が残されている。だが保護地での生活にはなじまない動物もいる。例えばゾウである。

かれらは日に何キロも歩き、場所を移すことで干ばつにも耐え、生き長らえてきた。しかしかつての食料収集場所に集落ができ、また道路の建設等によって移動ルートが塞がれ、生存数が減ってしまった。これを防ぐために道路の下に簡単なトンネルを掘ったところ、24時間も経たないうちにゾウが通り始め、今ではすべてのゾウがその道を通して適所に移動が可能になったという。

このエピソードに、私は身につきまされた。先月、類似の経験をしたからだ。東京の西端、高尾山周辺に環状高速を通そうという計画が持ち上がったのが1987年。豊かな自然と動植物の多様性を守るための反対運動が起きたが、2012

年に開通した。昨年(2013年)末、その高尾山に登った際、かつてあったはずの道が探せず立ち往生した。圏央道の巨大なジャンクションに隠されてしまっていたのである。食料は十分にあって、だが自分がもし動物だったら…、と思ったとき、ぞっとした。

『アフリカ』が提示する課題を自分たちの問題として感じてもらうと、ゾウのエピソードを見終えたとき、学生

たちにこの話を加えてみた。思わぬ感想もあって戸惑った。「先生は獣の側なんでしょうね」人間と獣がいたら、こっちじゃなくて、あっちなんだ」

もちろんこれは冗談半分のコメントだ。が、私にとっては大いに教訓的

だった。世は正にグローバル世界。人間と獣、日本人と外国人等々、多様な生物・価値観が共存しうる世界を可能にするための小さなトンネルを掘り起こす作業はあちこちで必須。未来の科学技術者である理科大の学生を、そうした多元的な価値観をもつ人間として育てることに、多様な価値観・文化を背景にもつ外国語教育も十分貢献しうると考え、爾後、その方策に頭を巡らせては苦楽する日々である。

出典:『理大 科学フォーラム』2014年3月号、63頁(2014年3月1日発行)